

研究課題 (テーマ)	大学生のための「読み書き聞き話す」能力開発のために		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	教養教育	教授	原口志津子
	教養教育	教授	奥田 実
		准教授	岡本 啓
		准教授	平野 嘉孝
		講師	井戸 啓介
研究結果の概要			
<p>本教育プログラムで、2011年度に実施した内容は、以下の通りである。</p> <p>(1) 言語能力の現状把握</p> <p>学部1年生と2年生を対象として、英語実力テストおよび日本語能力基礎テストを実施した。現在の1,2年生が、中等教育において履修した英語は週当たり約3時間(必修 学校側判断により2時間追加は可能)しかなく、中等教育で学ぶべき内容の定着度は低い。これについては、前年度までの教養教育英語担当教員による「新英語カリキュラム素案の開発」(新教育プログラム 2009・2010)においても指摘されてきたことである。</p> <p>日本語については、母語でもあり、初等教育以来の蓄積があるので、当然ながら、英語と比較すれば語彙、漢字、文法等の定着度は高い。しかしながら、必ずしも大学での学び、またキャリア形成のために十分な日本語運用能力とは言えない状況であった。</p> <p>(2) 英語および日本語に関するカリキュラム改訂のための研究会、非常勤講師懇談会の実施</p> <p>(1)の現状を踏まえ、かつまた、社会がますます高いコミュニケーション能力を求める現状ともあわせ、社会に出て通用する、大学生のための「読み書き聞き話す」能力開発のために、適切な改善プログラムを検討した。</p> <p>具体的には、1年次必修科目「日本語表現法」設置のための研究を行い、検討を行った。英語については、教養教育成員全員においても、改革趣旨についての共通理解をもつために、1年次必修英語科目のテキストを各教員に配付し、英語教員から教養教育成員に説明を行った。また、非常勤講師に多くを依存する英語教育においては、学科内の検討だけではなく、改革の趣旨を徹底し実効をあげるために、非常勤講師懇談会を実施した。</p>			
今後の展開			
<p>「日本語表現法」の設置、英語カリキュラムの改訂の効果をはかりつつ、本学学生の「読み書き聞き話す」能力のさらなる改善をはかる。</p> <p>効果測定のために、昨年度に引き続き、英語実力テストおよび日本語能力基礎テストを実施する。</p> <p>「日本語表現法」については、担当者と総合科目教員による検討会を行い、本学学生の日本語運用能力の改善点を洗い出し、次年度のテキスト作りを行う。また、日本語表現はすべての科目の学習とキャリア支援に関連することから、その趣旨について機会を設けて学内に発信する。</p> <p>英語については、引き続き、科目担当者間の緊密な検討会、非常勤講師懇談会を実施する。</p>			